
無軌道連載小説「輪廻のミナト」

永野かたる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

無軌道連載小説「輪廻のミナト」

【Nコード】

N8939Y

【作者名】

永野かたる

【あらすじ】

mixiからの転載です。

第一話 舞子との別れ

幼い背丈から彼女たちを眺める僕は余程心細そうに映るらしい。彼女ら三人組は僕を心配して、何かと声をかけてくる。その中に、尾鳥舞子が居た。

おかっぱだった髪型がすっかり長くなり、後ろで結んでいる。細く輝く瞳の下にほくろがあり、三人組の中では一番背が低いが、すくすくと成長している様子がうかがえる。

「やっぱりこの子迷子だよ」

舞子の友達が心配そうに僕を眺める。小太りながら、人の良さそうな顔をしていた。

「ねえ、君何処から来たの？」

舞子がしゃがんで僕の頭をなでる。僕は正直に話した。

「えっ！ 隣の県じゃない」

三人が驚く。それはそうだ。僕はすっかり金を払って、駅をつたってここまでやってきたのだ。迷子などでは決してない。

「お母さんどうしたの？」

「ちよつと一緒にいこう。ほつとけないよ」

僕は断ろうとしたが、舞子たちは強い使命感を抱き、僕を保護しようとしている。どうにも拒絶できなかった。やはり小さい僕は目立ち過ぎるのだ。

僕は舞子たちと一緒に近場の警察まで足を運び、その場で僕は保護された。舞子たちはしばらく僕と一緒に居たが、警察官に後を任せて帰っていった。

立派に、なったものだ。

僕は舞子の後ろ姿をぼんやり眺めていた。視界がはっきりしないのは眠いからだ。やはり六歳の僕は体力に乏しい、無茶をしてしまった。

僕は母曰く「もみじのような手」をこすり合わせて、暖を取った。

指と指の間にまだ舞子が見える。

舞子が、ふと僕の方を振り返った。何を思ったのだろう、僕はドキツとした。

舞子は微笑して、また友達と一緒に歩いていった。

もう、何も心配することはない。僕は舞子の後ろ姿に向かって呟いた。

さようなら。

妹よ。

第二話 担任は

緑苔の広がる旧校舎の裏に俺はたたずんでいた。陽は建物に遮られ暗い。ひんやりとした空気が首を撫でる。その静寂と孤独がなんとも心地よく感ぜられた。

春休みが終わり、今日から高校二年生になる。だが新しいことが始まる割に、初々しい気分にはなれなかった。むしろ徒労感、誰かに何かをやらされている感覚。そのせいか頭はだるく、人生に飽きがきているようにも思う。

それに比べて、この暗く静かな景觀は俺に自分を与えてくれる。ここに居れば俺は俺であり、他の誰でもない、生きていることを肌で感じさせてくれる。

時間的にクラス替えが行なわれている頃だろう、遅れていくのは慣れているが、それにしても次につるむ連中がどんな顔か見に行くのも一興か、俺は気だるい身体を伸ばしてほぐし、校舎の方へとぼとぼ歩いていった。

途中ですれ違う生徒は俺の顔を見ると目を反らす。喧嘩っ早いせいかヤンキーだと思われるらしい。いや、俺はヤンキーなのか？ 少なくとも優等生ではない。

昇降口からクラスに戻る生徒たちが多数。体育館で校長の長話でも聞いていたのだろう。タイミング的には最高だ。

俺は廊下に貼りだされたクラス表を見て軽くしかめっ面をする。

「またあいつと一緒にか」とうんざりした。

そして三階の二年のクラスまで学生鞆をぶら下げながら足を運んだ。

「あ、ミナト！」

クラスの女子が俺の名を呼んだ。俺を脅しつけるかの如き眼力を持つ、ショートカットに丈の長いスカートのそいつは倉木美幸。去年も俺と同じクラスで、委員長をやっていた。その真面目な取り組

みぶりのせい、男女どころか他クラスにまで委員長が通称である。

「あんたまた学校さぼったね。よく進級できたと思うもん。ダブリじゃないのが不思議で仕方ないな、今からでも新入生のクラスに入れてもらったら？」

こいつはどうも俺につつかかってくる。倉木曰く、不真面目な奴を見ていると苛々するらしい。

「悪いが俺は成績優秀なんでね、単位だって足りてる」

「やだやだ、余裕かましてる奴ってむかつく。どうせいつか皺寄せがくるけどね」

「なんだ皺寄せって」

「その言葉通りよ。わからないなら因果応報とかでも良いわ」

「付き合いきれん」

俺は倉木を無視して自分の席を探した。俺が通るたびに怯えた生徒が道を開ける。別に殴りやしないよ。

席に着くと、クラスの一員になったような気がする。俺はこれからここで一年やっていくのだ。他の連中と同じ時間を過ごし、頻繁にサボっても基本的には連帯していく。

まあ、きつと何も成さないのだろうが。

宇美川湊、十六歳、男子高校生。これが俺のプロフィール。成長期は未だ止まらず、身長は百七十五を越えそう。最近体重が落ち目なのが気がかりか。

その時の俺は、それでいいのだと思っていた。心の片隅に何かあったとしても、自分の中で許せていたはずだった。

だが、彼女は来た。

新入生の前に現れた新担任。ドアを開ける。カチューシャで留めた長い髪、細めの瞳に薄化粧が映えて、その下に目立つほくろ。

俺はその瞬間、あつと口を開けて、目を見開き、身体を席に乗り出し転げ落ちそうになった。

一目で、大人になった尾島舞子だということがわかった。

その瞬間、俺は思いだしてしまった。自分が「尾鳥満」だったということ。前世を知りながら宇美川湊として生きているということ。

舞子が笑う。幼い少女の面影が頬のふくらみに残っていた。なんという偶然だろう。隣の県に居たはずの舞子が、俺のクラスの担任として赴任してきたのだ。神の采配か、運命の悪戯か。何の間違いかを計算しても、事実は目の前にある。がくん、と脳裏に重圧がのしかかった。

俺はなんとか身体を起こすと、周囲のクラスメイトが何事かと俺に注目していた。目が合った奴が数人目を反らす。

「その君、大丈夫？」

舞子が俺に声をかけてくる。なんとも柔らかな声質に人を慈しむ気持ち伝わってきた。実は十年ぶりの再会だという事実を当然知らない。俺は小刻みに身体が震え、不思議なことに泣きだしそうだった。そこにあるのは感動か？ それとも恐怖か？ 駄目だ、ここには居られない。

「すいません」

俺は席を立ち上がり、舞子から目をそらして歩き出した。

「ちよつと、どうしたの？」

舞子が慌てて俺に近づいてきた。不安げに目を開いている。

「いてえから保健室行ってきます」

「痛いって……」

そう言いつつも、俺は自分が不良をやっていることが恥ずかしかった。しかしこの立ち位置は集団の中でも自由が利いて便利なのだ。俺は泣きだす前にこのクラスから出ていく。そして旧校舎の裏で再び一人の人間に戻るのだ。今の俺は不安定すぎる。舞子、お前のせいなんだぞ。

「ちよつとミナト！ あんたどうしたの。顔真っ青だよ！」

倉木美幸の言葉に俺ははっとした。俺は今、青ざめている。何かに、追い詰められている。それはそうだろう、これから毎日、舞子

の顔を見なければならぬのだ。できればせめて今すぐ留年したい。倉木の言うことももっともだ。

「君！ 待ちなさ……！」

不意の事故だった。舞子の両足が床から離れる。前かがみに倒れていく舞子。俺はコンマ一秒の反応で、舞子の両肩に手を伸ばす。身体が先に動いた。それを動かしたのは多分、俺の魂だ。

「ああああーっ！ あ……？」

「お、おい！」

間一髪、俺は倒れそうになった舞子を抱き支えた。その身体は細く華奢だ。すっかり食べているのだろうか。

「おいお前、大丈夫か！ 怪我とかなないよな。全く、全然成長……じゃねえ！」

余計なことを言いかけてはつとする。周りの生徒がきょとんとした目で俺を見つめている。

「……あは、君、不良だと思ったら、結構優しい子なんですなえ」
舞子が嬉しそうに口元を綻ばす。俺は目が泳ぎ、その場に崩れ落ちる。次の瞬間、クラス中が爆笑の渦に巻き込まれていくのに何の抗議もできなかった。

舞子が俺の両肩をパンと叩き「先生と一緒に頑張りましょう！」

私はみんなと一緒に成長していきたいのです」と言い切った。

立ち上がって席に戻ろうとする俺に倉木が意地の悪い笑みを浮かべ「あんた保健室行くんじゃないの？」と余計なことを突っ込んでくる。

「うるせえよ……って、おおい？」

「きゃあ！」

今度は舞子が生徒の鞆の紐に滑って後ろにこけそうになる。俺はまたコンマ一秒か二秒くらいの差で舞子を抱き起こす。

「エンドレスかよ……」

今度はクラス中が呆気にとられている。自分たちが途方もなくドジな担任を戴いてしまったことに不安を感じているのかもしれない。

俺は十年の月日、舞子がどうやって生きてきたのか思いをはせていた。人形のように綺麗な手で舞子は足をさすっている。俺は舞子に対して、宇美川湊として接していかねければならない。だがこの二回の危機を救った俺は、間違いなく「尾鳥満」だったのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8939y/>

無軌道連載小説「輪廻のミナト」

2011年11月26日21時59分発行